

土を捨てたハーブ栽培は「おもしろい！」

今月はハーブの話題です。愛知県豊川市下長山町の石黒正康さん(47才)は大学卒業後、専業農家として家業を継がれたそうです。所属されている東三河温室組合は、年商30億を扱う一大産地として知れ渡っていますが、葉物特に大葉の扱いが多く、石黒さんも大葉を中心に生産されていました。たい肥など土づくり作業が大変であること、販売単価の低下などから、7年前ハーブにも取り組み、現在大葉600坪、ハーブ400坪の規模で生産されています。この間、土耕の持つ宿命である連作障害への抜本的な解決を求めて養液土耕、ロックウールなど、さまざまな取り組みをされてきましたが、本年水耕導入を決意され5月から栽培が開始されました。かねてから水耕

には興味を持たれていましたが、この東三河地区は水質が良くなく躊躇されたそうですが、M式たよりNo75(2004.2)でご紹介した鈴木水耕園(鈴木章仁氏)とも交流があり、順調にしている様子、採用していた「無排水循環水耕システム」のTBR株式会社福井常務の勤めなどから今回導入に踏み切られたとのこと。鈴木水耕園と同様に地下養液タンク中にはバイオコード水質浄化装置が設置されています。

栽培品目はバジル、ルッコラ、スペアミント、ペパーミント、デトロイト、レモンパーム、パラゴンなど多品目にわたっています。20g入りのパック包装で東三河温室組合経由の系統ルートで関東、中部、関西へと出荷されています。連作障

害には、ほとんど手を焼いておられ、その結果が養液土耕、ロックへのチャレンジだったわけですが、どれもイマイチに終わり水耕に取り組み約半年、現在の心境をお聞きすると「おもしろい！土は捨てた！」と答えていただきました。魅力は「生育の早さ、生育の揃い」でこれは土耕では得られないと水耕システムのメリットを評価していただきました。また養液の温度を制御することによって、夏冬を問わず年間を通して安定して作れる、これは大きい・・・と色々なシステムを経験された結果の声だけに我々にとってもうれしい限りでした。「まだ半年なので、なんとも言えないが奥が深そうで、それを追求するのが楽しみだ」と結んでいただきました。(担当 川村庄一)

